就職活動を振り返って

アジア・太平洋文化論大講座
西川征克（トヨタ自動車内定）

これからお話しすることは、私の個人的な体験です。決して就職活動のルールなどではありません。ですから参考として気楽にお聞きください。

中国での体験

私が就職活動を本格的に意識しはじめたのは3年生の１月です。大学卒業後の進路を色々考えた末、企業への就職を選択しました。実を言うと、その頃から自動車業界、特にトヨタ自動車への就職を希望していました。それは、以前体験したある出来事がきっかけとなっていました。

私は 3 年生の時、1 年間北京に留学しました。その時に旅行したトルファンという都市でのことです。私がタクシーの運転手と話していた時、「日本のクルマは性能がいいねえ。『フォンティエン』（トヨタの中国語名）のはいいよ。」と彼は言いました。トルファンの夏はとても暑く、砂や塵も多い上に、道路の整備状況も完全とは言えません。そうした状況下でも、日本のクルマ、そしてトヨタのクルマは現地の人から高い評価を受けていました。この出来事は私にとって、後々の就職活動の方向性を決定する分岐点のひとつとなりました。

その後、3 年生の夏に帰国しましたが、早速卒業研究に取りかからなくてはなりませんでした。私は中国の自動車産業についての勉強を始めました。やはり、トルファンでの出来事がきっかけでした。ですからその後に迎えた就職活動で、自動車業界を第一志望に考えたのはむしろ自然な成り行きだったのかもしれません。

就職活動にあたって

こうして就職活動を本格的に開始したのですが、活動を始める前にじっくりと考えたことが二つありました。

第一に「なぜ就職活動をするのか？」ということです。つまり、大学卒業後の進路は他にもたくさんあります。その点を考慮せずに活動を開始すると、後々困ることになると思いました。私の場合、①大学卒業後はすぐに社会に出て自分の実力を試したい、②自立して生活を送るために、また将来設計の上からなるべく安定した経済的基盤が必要である、という理由から就職活動を始めることにしました。

第二に「なぜ自動車業界で、なぜトヨタ自動車への就職を希望するのか？」ということです。私の場合、大学での勉強の延長線上に業界研究と企業研究がありました。自動車産業は総合産業と言われ、関連産業や世界各地の経済にも多大な影響を与えます。また、環境問題や交通渋滞など社会に対して様々な課題も残しています。自動車産業の動向は社会

から注目されると同時に、直接的に社会に貢献する機会も多く、そのスケールも非常に広大です。中でも、トヨタ自動車は業界のリーディングカンパニーとして社会に対する責任は重く、それに答えられる実力もあると感じました。私はこれらの点に魅力を感じて就職を志望しました。ただ、これも書籍などを通して得た知識に基づく判断に過ぎません。やはり、企業とは人の集団です。私たちは業績や株価、時には本社ビルがきれいだとか大きいだとか、様々な基準から企業を評価します。でも、それらすべては素晴らしい人材があって初めて成り立つものだと思います。ですから、企業のイメージだけではなく「真の姿」（社員の方々、仕事の現場）を知る必要がありました。要するに、机に向かったままでは就職活動をすることは無理だと思いました。そこで、この点は実際の就職活動の中で考えていくことにしました。

就職活動の流れ

1 月末に、就職活動の一環として個人的にトヨタ自動車の工場見学に参加しました。実際に、自動車の製造現場を見れば企業をより身近に見ることができると考えました。この時の経験は非常に貴重なものでした。巨大な工場で、次々と自動車が流れ作業で作られていく光景に圧倒されました。同時に多くの現場の方々が働いてられる姿から、企業のイメージではなく、企業の「真の姿」を垣間見ることができました。さらに、他の企業説明会でも生産システムや財務管理の手本などに、しばしばトヨタ自動車の名前が登場することにも驚きました。このころから、自分の中でトヨタ自動車はイメージから徐々に変化し始め、現実味を帯びたものに思えてきました。

そして、2 月末には大学内でトヨタ自動車のセミナーがあり、3 月になると実際に社員の方々とお会いできる機会が増えました。社員の方々はどの方も個性豊かで、また毎回勉強させられることもたくさんありました。そして、最終的にトヨタ自動車を第一志望にしようと決めたのです。それは社員の方々から受けた印象で決めました。私はこんなに偉そうなことは言える程の人間ではありませんが、当時の自分なりにそう感じたのです。

実を言うと、当時の私はいわゆる「マニュアル」人間になっていました。就職活動の対策本を読みあさり、それを忠実に真似ようとする傾向がありました。そうした本を読むことが悪いと言っているのではありません。むしろとことん読むことは良い事だと思います。ただし、情報収集や不安解消の手段としてなら構わないと思います。一方で、それを元に背伸びをして「優秀な」学生になろうとすれば、個性の喪失に繋がるので危険です。私はこの事を頭では分かっているつもりでしたが、結局は実行できていませんでした。

そんな私に対し社員の方は次のように諭してくださいました。「完璧でなくてもいい、それが人間味ってものなんだから。」完璧な人などそもそも存在しません。であるにも関わらず、私はそれに成り済まそうとしていることが社員の方には見て取れたのだと思います。そこを指摘して下さった社員の方の温かい気持ちに私は感銘を受けました。そして最終的に志望することに決めたのです。その後、4 月末に本社で最終面接を受け、トヨタ自

動車から無事に内定をいただきました。その時点で私の就職活動は終了しました。

皆さんへの言葉

はじめにもお話しましたが、就職活動にルールはありません。皆さんのペースで無理をせずに進めてください。体調を崩したら、それこそ肝心なチャンスを失うこともあり得ます。ただ、無理をしないのと怠けるのとでは意味が違います。やはり、皆さんは人生の大きな分岐点にさしかかっています。その現実からは目を背けたりしないでください。

私は就職活動に対して期待と不安の両方がありました。極論を言えば、大学まではペーパーテストの結果だけでも十分でした。しかし、就職活動では初めて社会からの厳しい評価を受けることになります。ペーパーテストだけではなく、人格や、潜在性や、マナーまで様々です。その点で、果たして自分は如何ほどの人間と見てもらえるのだろうかと、期待と不安が半々に入り混じっていました。

しかし今となっては、就職活動はもっと広く深いものだと思っています。企業との相性もあります。運もあります。縁もあります。ですから、選考からはずれる事と人間性を否定される事は必ずしもイコール関係ではありません。理由はもっと複雑なはずです。そこをよく反省して、次の教訓につなげられる人こそが納得の行く就職活動をできる人だと思います。

国際文化学部は不利だとか、留学経験がないから不利だとか言う学生の話を聞くことがあります。果たしてそうなのでしょうか？結論として、そうした事実のみに基づく有利不利はありません。第一、私はそうした言葉を逃げ道にしたくはありませんでした。むしろ、国際文化学部生は自分が勉強してきたことに自信を持ってください。私は大学で学ぶべきことは「知識」よりも「考え方」であると思います。しっかりとした考え方を持てば、知識はそれに伴いますし、知識を活用することができます。しかし、知識ばかりでは何も始まりません。幸いなことに、国際文化学部には少人数制のゼミなど、自分の意見を主張し、考え方を鍛える機会がたくさんあります。皆さんはそうした経験を生かして就職活動に取り組んでください。そして、企業側も、学生の限られた専門知識よりもその人の思考力や状況変化への対応力を求めていると思います。

また、学生時代の何をとってもアピールできないということはないと思います。どの学生も基本的には同じ時間を過ごしているのですから、その時間に相当する経験は積んでいるはずです。経験がないというよりも表現方法に、もしくは自己分析に、問題がある場合も考えられます。それでも思い当たらなければ、就職活動を学生時代で最も力を入れることにすれば良いと思います。そうでなければ、この機会を逃すと大学時代を通して本当に何も残らないことになってしまいます。

私は当初から希望していた企業に無事就職することができました。ただ、これは何度も考え直した上での判断です。就職活動中もこの作業を繰り返し、それでも期待を裏切られないでいたのはむしろ幸いだったのかもしれません。そして、ここではあまり触れません

でしたが、トヨタ自動車以外にも多くの企業をまわり、たくさんの社会人の方々とお会いできました。そして企業の選考からはずされたり、自分の考えが分からなくなったりと、思い悩むことも多々ありました。でもその都度、自分を成長させていくことができたのだと思います。皆さんもこれから多くの壁にぶつかるかもしれません。その時は納得が行くまでじっくり考えてみてください。自分で答えが出なければ、友人や先生、家族や先輩に相談してみてはいかがでしょうか？それぞれの方が経験に基づくアドバイスを下さると思います。ただし、最終的な判断は皆さんが下してください。

大変、長々とお話してしまいました。個人的な話でしたが、最後まで聞いてくださってありがとうございます。末筆になりますが、皆さんのこれからの就職活動が無事に運ぶようお祈りしています。（2002 年 2 月 28 日）